早稲田大学審査学位論文(博士)の要旨
3052-2

W
学位論文
3052
2

博士（人間科学）学位論文　概要書

高齢者に対する回想法の研究

2001年1月

早稲田大学大学院人間科学研究科
太田　ゆず
指導教授　上里　一郎

博士論文研究概要書　　太田 ゆず

本研究では，高齢者の回想法についての実証的な検討をおこなっている．まず，第１章では，高齢者の回想法の研究について展望した．第２章では，第１章の展望の結果，①回想（過去を想起し，表出すること）に関する適切に測定することができる尺度がない，②回想について多面的に検討した研究はあまりおこなわれていない，③高齢者の回想類型についてはあまり明確にされていない，④高齢者の回想法の心理的プロセスが明確になっていない，⑤一般の高齢者のための回想法のプログラムは開発されていない，という５点が問題点としてあげられた．

第３章では，問題点①を解決するために，回想を測定することができる回想機能尺度（JRFSE），回想傾向尺度（JRS）が作成され，信頼性と妥当性に関する検討が行われた．

第４章では，問題点②を解決するために，従来の回想と適応との関連の検討から，高齢者の適応を規定する過去回想の要因を検討した結果，適応を規定する要因は，人生への影響と回想機能であることが明らかにされた．続いて第５章では，第４章を受けて，回想機能にもとづいて回想類型を検討し，心理的適応との関連性や回想内容の質的な分析がおこなわれた．回想類型は，「両価型」，「積極型」，「否定型」，「叙述型」の４つの回想類型に分類されることがわかった．適応との関係から，「両価型」は，回想量が多く，自尊感情や統合感が低く，否定的な感情が高く，精神症状も呈しやすいことが示された．「否定型」は，回想量は，中程度であるが，自尊感情や統合感が低く，緊張，怒り，疲労，抑うつなどの否定的な感情が高かった．回想内容では，否定的な回想が多く，自己に対して批判的であり，人生について考えるような回想が多く，出来事によって自己理解を深めている．人生全体には，否定的でもあり肯定的でもあり両価的であった．全体的に自分のことについては，否定的にとらえることが多くなっている．「積極型」は，自尊感情や統合感が高く，活気などの肯定的な感情が高く，否定的な感情はあまりみられなかった．質的な検討では，「満足感を伴う回想」と「人生の評価を伴う回想」が多く，「否定的な回想」は少なかった．すなわち，全体として，楽しい出来事を楽しんだり，幸福感や満足感を伴う回想が多い．一方，否定的な感情を伴う回想は，皆無ではないが，比較的に少なく表出される．回想の中で，人生について考えたり，自分について考えながら回想をしているといえる．評価の仕方では，肯定的な評価をおこなうことが最も多かった．否定的な評価は皆無ではないが，肯定的な評価の半数ほどであった．「叙述型」は，回想量が全体的に少ないが，自尊感情や統合感が高く，人生満足度が高かった．「叙述型」は，「積極型」，「否定型」に比べて，回想機能に分類される回想内容が少なかった．すなわち，出来事をそのまま語り，特に評価をおこなわないことが多い．全体としては，肯定的

な評価が多かった．さらには，各年代での回想はあまり多くおこなわれていないが，人生をまとめるような回想の中で，肯定的な評価が多くなっている．人生の後期の回想が多くおこなわれることが示唆された．

第６章では，問題点⑤を解決するために，回想法による心理的なプロセスモデルを構成し，共分散構造分析を用いながら，「回想による心理的プロセスモデル」が構成された．これは，想起→評価→回想機能→心理的適応の流れで，適応にいたるまでのプロセスが説明されるものである．このモデルより，高齢者のための回想プログラムモデルを提案し，過去の評価，および回想機能に適切に作用するような介入の必要性を提示した．

続いて，第７章では，第６章で提案された心理的プロセスモデルにもとづき，プログラムモデルの構成を行った．さらに，第５章の知見をもとに，介入の対象を「否定的な回想」の高い対象者に焦点を当て，Life reviewを用いたグループ（プログラム１）と評価の変容に積極的に焦点をあてたグループ（プログラム２）をおこなった．回想プログラム１では，グループを促進する教育的なアプローチに加えて，グループLife reviewによる回想をおこなった．この結果，プログラム１では，否定的な回想が低減し，抑うつ・落ち込みなどの気分状態が改善された．プログラム２では，グループを促進する教育的なアプローチに加え，評価を改善することに焦点当てた介入を行い，グループLife reviewをおこなった．この結果，出来事が人生に及ぼす影響について肯定的に評価し，否定的な回想が低減し，心理的な安定が増加し，怒りや敵意が低減していた．プログラム１とプログラム２は，統制条件よりも効果があり，プログラム１とプログラム２では，プログラム１のほうが，否定的な回想の改善量が大きかった．事例検討では，回想プログラムによって著効したのは，「両価型」であった．第８章では，これらの知見をふまえ，この研究の成果と課題について考察した．